

日本

# ハンザキ研究所ニュース 2012(3) : 通巻 No. 75



発行 2012年3月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## ヒキガエル

ガマガエルとかオンビキなどと呼ばれる陸生のカエルで、カエル合戦の主としてもよく知られているが、他のカエル同様に数が減っているのではないかと心配されています。春まだ寒い頃に水溜りなどに集まってきて細長いひも状の卵塊を生み出します。当ニュースでもNo.15, 28, 39に登場させました。ハンザキ研周辺では4か所の産卵場を見つけていました。15号に登場の第1産卵場では今年も産卵していましたが、3月28日に見に行った時には4個体の親ガエルを初めて確認できて、今年は少し遅れているようだなと思いました。4月7日に再度訪れたら、新に2卵塊が生み足されていました。28・39号での話は、産卵場に集まった親ガエルが食害されていて、犯人がアライグマらしいという話です。今年も第1産卵場で食害を受けた残骸を確認しました。毎年産卵数が減ってきています。



第5産卵場

第2産卵場はイノシシのヌタ場になっていて卵塊が陸上に刎ね飛ばされている所です。ここも毎年産卵しているのですが、卵数は確実に減っています。第3産卵場は林道の真ん中にある小さな水溜りに僅かな卵を見てきました。車に寸断されて短く切れてしまっています。この3か所の産卵場はすぐ側により大きな水溜りがあるのにそちらでは産まないようです。第4・5産卵場はやはり林道の中央の水溜りで、雨が降るたびに卵やオタマジャクシが下流側へ移動していきます。第6（5・6は今年初めての確認）産卵場はきれいな泉のような水溜りですが、雨が降ると湧水量（流入水）が増えて溜りから流れ出していくようですし、発生が進んだ所がかき混ぜられて天地が逆転して死んでしまうことも多いようです。これら6か所の産卵場はいずれも風前の灯のように見えるが、長い時間こんな状態を繰り返しながら続いているのかもしれない、年々の観察を続けていきたいものです。



写真1 ヒキガエルの第1産卵場(当ニュース15号と同じ場所)



写真2 ヒキガエル第2産卵場



写真3 ヒキガエル第3産卵場



写真4 ヒキガエル第5産卵場



写真5 ハンザキの赤ちゃんの餌集め



写真6 集められた水生昆虫の色々

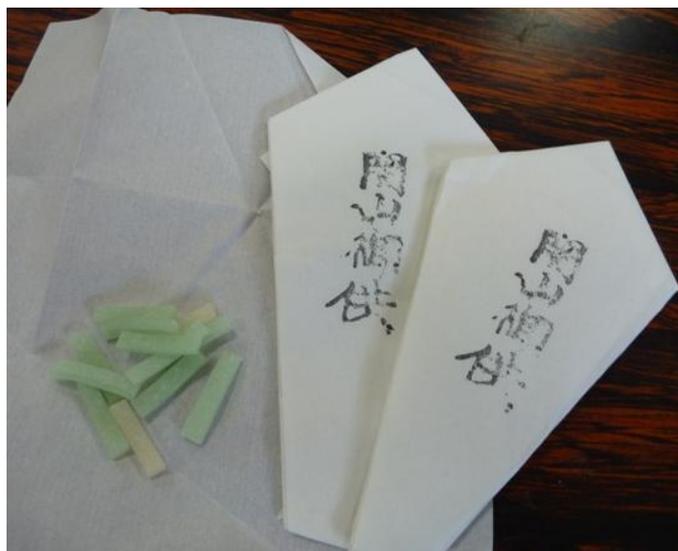


写真7 骨ぬきごかうさん



写真8 大型個体の全長測定器



写真9 鳥取からのイボイボのハンザキ



写真10 カリフォルニア大とのハンザキ観察会



写真11 手乗りシジュウカラ



写真12 雪解け後にモグラのトンネルが

## 鹿に食らいつくあんこう

事務局員 黒田 真澄

とある早春のことです。朝の散歩で橋の上に差し掛かった時、犬のタローがやたらと鼻を上に向けてクンクンと臭いをかぐので、引っ張られるまま川の方へ降りていくと、川の中に鹿が寝ているではありませんか！よく見ると、それは死体で胴体の上に大きな石が乗せてあり、猟師さんが仕留めた鹿を血抜きのために川に浸けているようでした。

子供の頃は川の近くの家に住んでいたもので、大きな鹿が川に浸けられていたのをよく見たものです。その時は腐敗しやすい内蔵を取った後の空洞になった鹿のお腹に、あんこう（オオサンショウウオ）が入っていたのを思い出しました。その頃、近所の猟師さんに

「いっぺんに5匹もあんこうが食らいついとったぞ。」

なんていう話を聞いたこともありました。これは確かめねばと近づいてみると、小さな角のある雄鹿で内蔵も取ってありお腹が裂けていますし、どうやら片方の後ろ足がモモのあたりから切り取られているようで、足の皮だけがブラブラと水の流れにゆれていました。周囲の流れを見わたしてもあんこうの姿は見えませんが、そんなに運良く出会えないかと、散歩の続きを済ませて帰りました。

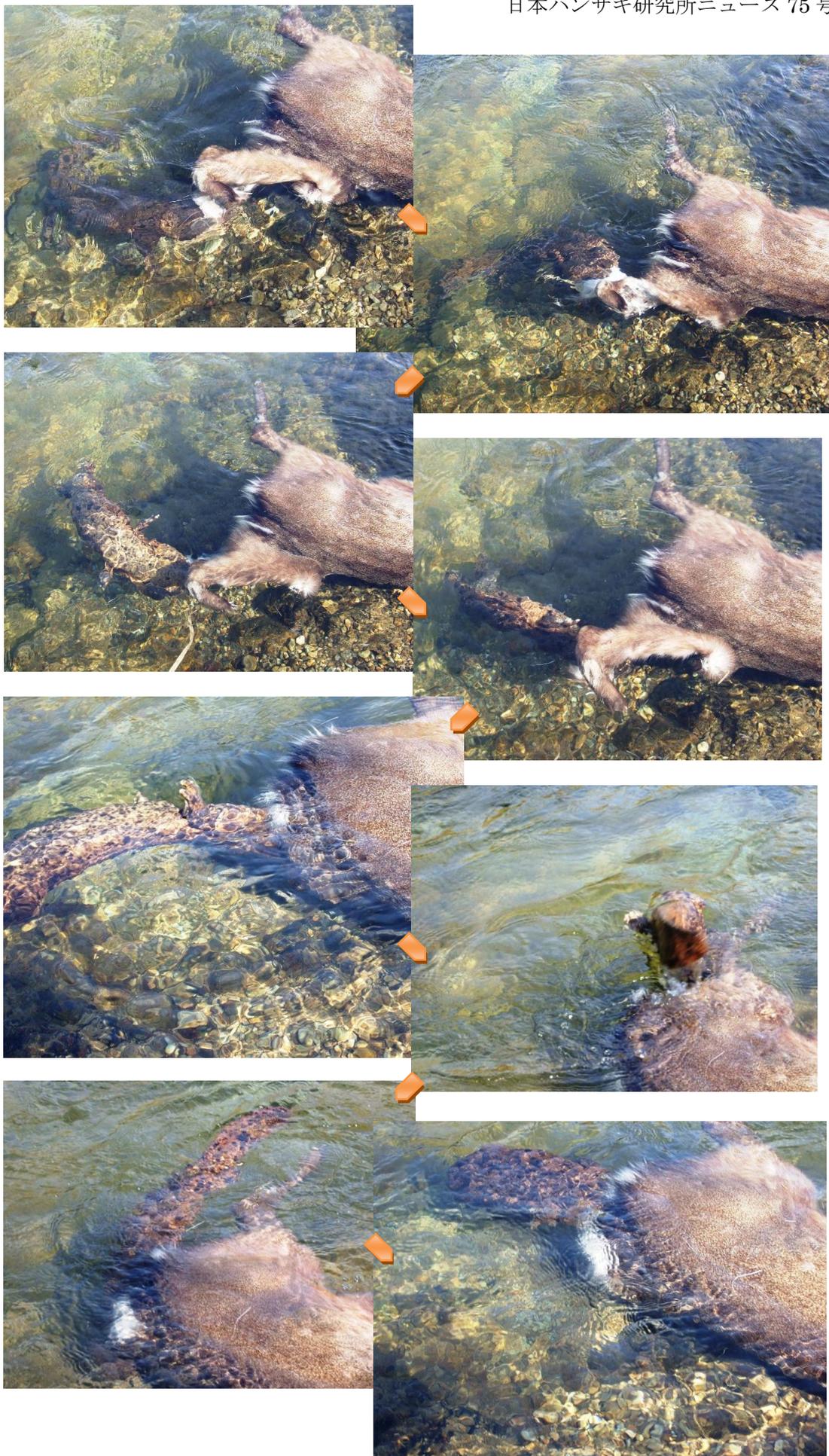
二時間もたった頃でしょうか、やはり気になるのでカメラを持って再度川に行ってみました。川の中の鹿に変わった様子はなく周囲にあんこうの姿も無し。やっぱりいないか・・・と川下に少し歩いてみると、水の中をズンズンと早いスピードで上がってくるあんこう発見！！血の臭いに誘われて下流からやってきたのでしょうか。

あんこうは川の真ん中を上がって行くのですが視力が弱いせいで、川岸に浸かっている鹿の横を素通りしてしまいました。通り過ぎた辺りで上流からの臭いが消えてしまったんでしょう、急に方向転換して今度は鹿に向かってやってきます。途中の急流に流されながらも、今度は正確に鹿の真下にやってきました。

そして臭いをかぐかのようにグイッとあごを持ち上げると、ブラブラしている鹿の足の皮にガブリと噛みつきました。ちょっと引っ張ったかと思うとおもむろに頭を回し、そのまま身体をグルグルと回転させ始めました。皮に噛みついたまましっぽを振り回すように回るので、身体が浮いてきてそのまま水面で二度三度と水しぶきを上げながら回転します。口を離してはかぶりついて回転をすること3度。やっと皮がかみ切れたようでその切れ端を飲み込んだように見えました。もっといい肉を目がけてまた噛みつくのかと思っていると、静かに鹿から離れて行き向こう岸の草むらへ潜っていきました。一口で満足したのか、鹿の皮では美味しくなかったのか分かりませんが、その後30分待ってみても出てくる気配はありませんでした。

ハンザキ研究所で保護しているあんこうが餌の魚を捕る瞬間もめったに見ることが出来ませんが、自然の川で鹿の肉にかぶりつくあんこうの姿を見て写真に写すことが出来たのはかなりラッキーでした。





## 骨抜きごくうさん

事務局長 奥藤修

この話は、黒川の地に正平 22 年 (1367 年) に大明寺を開基した高僧、月庵宗光禅師の修業中に起った出来事が、「オオカミと和尚さん」の民話として今も語り継がれております。これは、その番外編です。

話の前に、黒川地域の起こりを紹介したいと思います。黒川の起こりについては諸説あるようですが、(旧)黒川小学校がゆとり教育を活用して、生徒、先生、地元の古老達が協力してまとめた冊子「私たちの黒川」から一部を抜粋して紹介を致します。

この地域は、一説には千年前に荘園指定され、住人は木地師であろうと推察されています。木地師は文徳天皇 (850~857 年) の皇子・惟喬 (コレタカ) 親王を業祖として親王の第一の従臣で、小椋太政大臣藤原実秀の子孫と伝う。木地師には二つの家筋があり、一つを高松御所、一つを筒井公文書と言い、全国の木地師はその何れかに属しています (中略)。当地の木地師は高松御所系と推察されております。根拠として、黒川集落が位置する地形は周辺地域から眺めると山の八合目にありそこから上の木の伐採自由、通行自由などの、木地師の特権範囲であることなどと、「田畑名寄覚書」の小字名に木治屋敷・木治屋ヶ段などの地名があること。また、田植え唄 (鎌倉時代といわれる) に鎌倉御所の歌詞がありその内容から鎌倉御所は高松御所の隠語とされています。黒川の氏神は日吉神社で木地師の祖地 (近江の小椋郷) の日吉神社と同じであること等々の理由からですが確証は無いようです。参考に村名の移り替わりを記しますと、黒川園 (平安時代) 領主、藤原実資 / 新井黒川保 (鎌倉時代) 地頭、柏原左衛門二郎 / 黒川荘 (室町時代 (南北朝)) 領主、妙法院 / 余部庄黒川、山口郷黒川谷、但州朝来郡黒川 (何れも江戸時代) 天領、生野代官 / 但馬国第五大区朝来郡第六小区黒川村 (明治) / 生野町黒川 (明治 22 年 ~ 現在) となっています。また、黒川村が六つの集落 (黒川本村・大外・長野・梅ヶ畑・高路 (廃村)・簾野) として構成されたのは江戸時代の初期と言われております。

美濃の国から来た月庵宗光禅師は、正平 22 年 (1367 年) 大明寺を開基しました。その生活は質素で、深山幽谷の大変厳しい黒川で、簡易なカヤ葺き屋根と薪柴の床に獣皮を吊るした庵で修業を行っていました。ある日、寺領内にある丸石田の石の上で胡座を組んで修行をしていたところへ息絶え絶えのオオカミが現れて、「喉に刺さったとげを抜いてほしい」と頼みました。このオオカミは村人や旅人を襲うので大変恐れられています。そこで、和尚は因果を含めて刺を抜きオオカミを助けました。その後、集落、五里四方でのオオカミの災いは無くなり、又、オオカミはお礼として、多収量の餅米の穂を寺に持ち込み集落は大変栄えたと言われております。

毎年、大明寺で、4 月 23 日に月庵宗光禅師の法要が開山期法要として執り行われますが、その節、参拝者に寺の秘伝の製法で作られたとされる、御供 (極細の千切り状にしたお餅) が配布されます。この御供えが、喉に刺さった骨を抜く「ごくう」として知られており、何年してもカビが生えない「骨抜きごくうさん」として現在も参拝者の方から親しまれ愛されています。(写真 7)

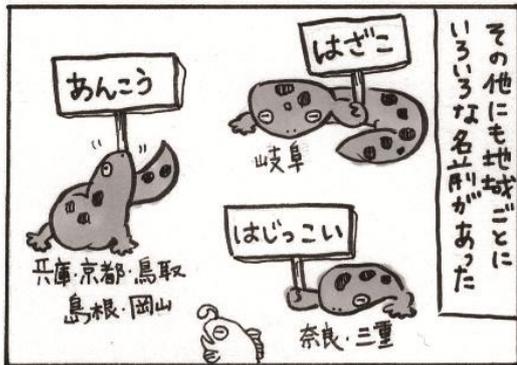
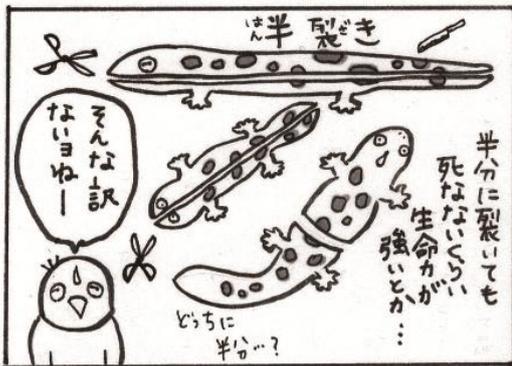
**木地師** (きじし) とは、轆轤を用いて椀や盆等の木工品を加工、製造する職人。明治初期までは、朝廷・幕府の許可を受けた木地師が全国各地の良質な材木を求め移住した。



そのら地域名



その6化石



サン吉: オオサンツウオ川にすむ王様である



トリ子: トリ聖宇宙人地球を征服するべくサン吉の生命力をさぐっている

ハンザキ研日誌

2012年3月

- 1日 鳥取県よりの冷凍ハンザキの解凍 (全長 125<sup>㌢</sup>、体重 18.0<sup>キロ</sup>)
- 2日 朝来市地域振興課と黒川区役員と3者会議、廃校の管理などについて
- 3日 神姫グリーンバスで下山
- 4日 神戸市立須磨海浜水族園にて助成金の成果発表会
- 5日 ビールと共に配送、帰所
- 6日 オオサンショウウオ保護センターの作業場の屋根から大結露水滴多々
- 7日 大阪府安威川ダム建設事務所より4名来所
- 9日 ・文化庁へ原状変更許可申請 (鳥取からのハンザキ保護の件)  
・ハンザキ研ニュースNo.73刊行 (1月号)
- 10日 事務局会議、10名参加
- 12日 雪掻き⑦
- 13日 ・円山川水系自然再生推進委員会、豊岡市にて  
・雪掻き⑧
- 14日 但馬県民局から5名下見に
- 15日 大阪府安威川ダム環境委員会、新大阪にて
- 16日 ・新名神道路大阪府域自然環境委員会、新大阪にて  
・水資源機構・川上ダムと打ち合わせ、新大阪にて
- 18日 神姫グリーンバスにて帰所
- 19日 兵庫県養父土木事務所・前田氏来所、オオサンショウウオ保護センターの最終打ち合わせ
- 22日 写真用パネル 20枚入荷
- 23日 ミニアクリウム再開に向けて水槽3本セット
- 25日 ウエダー5本納入
- 26日 朝来市消防の椿野氏他、使用目的変更について聞き取り視察に来所
- 27日 デマンドバスで食料調達に
- 28日 ヒキガエル産卵場2か所調査、食害痕あり、1か所では成体4 (多分オス) あり
- 29日 米国カリフォルニア大学のジョン・ハート教授と夫人、神戸大学蛸名教授らと共にハンザキ視察に来所、夜間に河川で観察会実施、1個体測定、5個体観察
- 31日 環境省にハンザキの譲り渡しについての申請書送付 (鳥取のハンザキの件)

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今年は積雪回数がダントツに多い。今シーズンは月半ばまでに8回もの雪掻きをさせられた。毎年のことだが、最初のうちは雪掻きも楽しいのだが回数が重なるに連れてうんざりしてくる。雪掻きのボランティアを募集したいのだがタイミングが難しい。